

図書室月報

2026年(令和8年) 8月5日 第759号

公民館の図書室は
学びの入口・みんなの本棚

国立市公民館 国立市中1-15-1
TEL.042-572-5141 / FAX.042-573-0480



PDF版

2026年8月は/

公民館図書室70周年記念

今回は、図書室をきっかけとして始まった講座に長年参加いただいている方や、公民館図書室ができるきっかけとなった土曜会で活動されていた方、日々図書室に親しんでいただいている方など、3名の方に記念号へ文章を寄せていただきました。



ブッククラブを 振り返って

中島 三恵子

私は国立市公民館は国立市になくてはならない宝と思っている国立市民の一人です。実は公民館図書室70周年記念に何か書くよう依頼されたのですが、読書家の友人のように本を借りたり、フラッと寄った中2階で雑誌をめくったり、とはせず利用者カードを作っただけで利用した気分になっている落第利用者なのです。そこでサテどうしようとなりました。その私が一つだけ長く続いているのが今のブッククラブ(元文学講座)です。私がこの講座に参加したキッカケは、今も一緒に通う姉の諦めない誘いがあったからです。「兎に角先生のお話が魅力的、そして参加者の個性的感想がまた面白い」と言う姉の言葉を信じ、学校は寝に行く所と思っていた怠け者の私は重い腰を上げ姉に着いて行っただけでした。この時の講師の先生が山崎一穎先生でした。作品は『サハリンへの旅』でしたが、個人で読んだ時は何だかパツとしない(と浅読みの感想?)この本がどうしたら魅力的になるのかと首をひねるばかりでした。

しかし、先生のお話は新鮮でキーワードとか時代背景とか、もうビックリ! 眠くなるどころか目パッチリだったのを思い出します。

文学講座の落ちこぼれを自認している私がよく続いたと自分でも驚くばかりですが、これは、公民館で開催されている文学講座だからだったと思います。大学でもカルチャーセンターでもないのです。試験もトーゼン順位付もありません。努力する人しない人賢い人そうでもない人も関係ないのです。ただ作品から何かを気付きたいと自由に読んで参加をすれば良いと私は思っています。

長く続いているこの講座には過去にも多くの素晴らしい先生方がお話に来てくださいました。中でも栗坪良樹先生と山崎先生には講義だけでなく色々とお世話になり講座の形を作っていただと思っています。

山崎先生はよく、公民館で学ぶことの意味を考えなくてはならないと仰っていました。年齢も経験も違う人々が共に学ぶことで「私」から「私達」になる、と。公民館で共に学ぶということは、よりよい市民になるための学習でなければなりませんと仰っていました。又、先生は、参加者はお客様ではない、主体的に関わっていくことが大切だとも仰っていました。それは自分の主張を通すことではなく、参加者が各々の出来ることで協

力し、場を作り上げていくことと思っています。決して無理をする必要はなく、その時々に来る人が出来ることをすれば良いと私は思うのです。それが色々な事情を持つ市民の「学び」に応える公民館活動と思っています。

以前私は長く公民館活動をされている方に、「国立市公民館には素晴らしい先生方が講師として来てくださるのですね」と話したことがあります。するとその方は、「それは違います。国立市公民館が実践してきた活動を知り喜んで来るのです」と仰ったのです。

その後、私も講座から少しの間公民館運営審議会の仕事に関わりましたが国立市公民館の成り立ちや、人権平和などを考える活動を知ること国立市公民館を誇らしく思う様になりました。

市民を繋げ、人権、平和を問い続ける公民館と講座を守り続けてほしいと心から願っています。

※図書室のカウンターでは、読んだ本について利用者と言葉を交わしたり、図書室月報への寄稿を依頼したり、講座やサークル活動の参考図書についてお話をしたりと日々様々なやりとりがなされています。

そんな中、利用者同士の深い関わりが持てる事業ができないかという当時の職員思いから読書会が企画され、現在の「くたちブッククラブ」につながり、50年近く続いています。

若者の集い 「土曜会」のこと

木島 常明



公民館図書室の開室70周年おめでとう
ございます。心からお祝い申し上げますと
共に「あれからもう70年か！」と感慨深
く受け止めて居ります。

公民館図書室の発端となった「土曜会」
の活動について寄稿を求められた。土曜
会が誕生した頃私は未だ高校生で土曜会
の活動初期～中期には繋がりはなかった
が、比較的初期から会員になっていた姉
を通じて当時聞いていたことに加え、私
自身が入会してから感じた事などを含め
て知る限りのことを纏めてみたい。

土曜会を語るには町の文教地区指定運
動について述べなければならぬ。昭和
25年6月いわゆる朝鮮戦争が勃発し、戦
後連合国軍の基地になっていた立川の米
軍基地が大々的に増強された。立川の街
は瞬く間に歓楽街化し、隣接する国立も
その影響を蒙り、元々学生を対象として
いた下宿屋や急増した簡易宿泊施設を米
兵とその相手をする女性達が利用するよ
うになった。子ども達への影響を心配し

た母親達が先ず立ち上がり、呼応して国
立地区在住の大学教授やサラリーマン、
学生も加わって「国立町浄化運動期成同
志会」が組織された。この「浄化運動」は、
昭和25年12月に東京都で制定されたばか
りの「文教地区建築条例」対象に国立を
指定して貰い、ホテルや特飲街(特殊飲
食店街の略、いわゆる「赤線」)などの
新築を阻止しようという運動に特化され
ていった。一橋大学後期学生自治会と教
職員が中心になって国立音大や市内4高
校も参加し「国立町浄化大学学校連合会」
も組織化された。若者が中心になって戸
別訪問で集めた文教地区指定推進の署名
は国立地区有権者の90%近く、それに駅
頭などで集めた通勤通学者からのものを
合わせた約1万名の署名を添えて議会に
提出した指定請願書は可決された。しか
しこの運動に対して本村地区(旧谷保村
地区)の住民や国立地区の商店の多くは
異を唱えた。反対派は指定推進運動その
ものを反米運動と捉え、また「文教地区
に指定されると街の発展が疎外される」
として多くの商店を巻き込んで「国立町
発展期成同志会」を結成して指定反対の
請願書を議会に提出した。この請願も可
決され、文教地区指定を巡って町を2分
しての大論争へと発展し、指定推進派に
よる推進反対商店での不買運動なども起
こる始末だった。しかし「健全な発展」

を辛抱強く町中に説得し続けた文教地区
指定派の努力が功を奏し、当初反対だっ
た商店会の方々も次第に理解を示すよう
になり、指定に賛意を示す議員が増えた
結果、昭和26年8月町議会において1票
差で「文教地区指定」を申請することが
決まり、翌年1月、「文教地区指定」が
建設大臣(当時)の正式指定を受けた。
文教地区指定運動の特徴は一党一派の主
張に偏らず、幅広く住みよいまちづくり
を願う住民を集集できたことであろうと
思う。当時は冷戦が激化し、アメリカと
ソ連の対立が世界的に拡大、市民社会も
その影響を受けていた。そんな中、指定
反対派は指定推進派を「反米運動」と位
置付け批判していたが、推進派はそうし
た主張を根拠のないデマであると反論し
ていた。もし町外の勢力が文教地区指定
とは別の文脈で影響を及ぼしていたら、
さらに市民の対立の溝は深まり、文教地
区指定はなし得なかった可能性もあるだ
ろう。

文教地区指定運動の中で署名活動など
実務、実労働に惜しみなく時間を割いた
のが学生を中心とする若者達であり、「土
曜会」もこの運動の最中、昭和26年夏に
発足した。一橋大学の学生有志、町在住
の学生を含めた若者達が「みんなで自分
の住む街を良くしよう」と土曜日に集
まっていたことから会の名称を「土曜会」

とした。指定確定後、真つ二つに割れた
住民感情をなんとか纏めたいと町民運動
会が提案された。若者のエネルギーを買
われて企画実行を任されたのが土曜会で
ある。婦人の会や自治会、商店会はじめ
各種団体の協力の元、一橋大学運動場を
借りて第1回国立町民大運動会(主催・
土曜会、共催・国立婦人の会、国立会、
東区商工会はじめ各種団体)が開催され
た。文教地区指定半年後の6月のことで
ある。文教地区指定運動での対立のわだ
かまりを払拭して、住民、商人、学校関
係者等老若男女5千人が集ったという。
未だ人口が2万人に満たない頃のこと
だ。当初指定反対だった商工会メンバ
ーをはじめ全町民のおよそ4分の1が集
い、お互いに理解し合い、その後の町
の方向付けにもなった企画だったのだら
う。



▲開室当時の図書室の様子

私が土曜会に入会したのは昭和29年、大学に入ってからである。既に会の活動は成熟期に入っており、週末を中心に次のようなサークルが活発に動いていた。毎月の新聞を発行する新聞サークル、『ぼろくそ詩集』という横A5判見開きの詩集を出していた詩のサークル、読んだ本を紹介し感想を述べ合う読書サークル、会員みんなが持ち寄った図書を管理し、町民に貸出しする図書サークル、そのほか、コーラス、レコードコンサート、人形劇、演劇、山岳（ハイキング）サークル等多岐に亘っており、会員数100名以上の時もあった。また夏休みや冬休みには保育園や大学のクラブ施設などを借りて小学生、中学生を対象に学習会を持ったりした。また、同時期に国立東南部のプレスタウン地域で同様の活動をしていた若者グループ「むさしの会」とも交流していた。さらに、昭和30年4月の



▲ ぼろくそ詩集

統一地方選挙では被選挙権を得る25才になつたばかりの有力会員を町議会議員候補に推挙し、みんなの応援で見事トップ当選を果たすなど活動範囲は非常に広がった。

土曜会の活動拠点は今の多摩信用金庫国立支店北側の三角地に建てられていた6畳二間ほどの小さな国立会事務所である。そこには謄写版（孔版印刷の一種）も設備されていたので新聞、詩集等は自分たちでガリ版を切り、謄写版印刷をしていた。そのころ発行された『ぼろくそ詩集』の一部は今でも公民館に写しが保管されている。また当時本は非常に貴重なものだったが、前述のとおり図書サークルの呼びかけで会員みんなが自分たちの本を持ち寄り、国立会の許可を得て事務所に書架を設置し、集まった300冊ほどの本をもとに全町民を対象にして「どうかい図書館」を開設した。昭和29年はじめのことだったと思う。週3、4回夕方から数時間開館し、会員が交代で貸出しを担当した。利用者から徴収した若干の貸出し料で新刊を買い足し、また寄贈本なども含めて2年間で蔵書は1300冊近くになっていった。

一方、GHQの指令で国立にも「国立町自治体警察所」ができたが、昭和27年暮れに自治体警察は廃止され、その施設を利用してほぼ3年後の昭和30年11月に公民館が開設された。翌年4月、公民館の最初の専属職員として、一橋大学を卒業したばかりの土曜会の有力会員が採用され（同時に採用された2人目の専属職員は前述むさしの会会員の成蹊大学新卒者）、その最初の活動として取り組まれたのが図書室の開設である。当時土曜会は活動が若干マンネリ化し、会の存続についての議論が盛んに行われ始めていた。そこで、公民館に図書室を作るのなら土曜会図書館を一括寄贈しようと言うことになり、昭和31年夏、会員みんなで会の蔵書約1300冊を国立会事務所から、改装された公民館に運び入れ国立最初の図書館が誕生した。この懐かしい思い出も70年前のことになる。土曜会は、その後地元から離れるなど会員数が次第に減少し、自然消滅的に活動を停止していった。おがましい言い方をお許しただけなら、土曜会の活動全体が公民館活動に引き継がれ、生かされていったようにも考えられる。

当時のことについては、公民館専属職員第1号であり、後の公民館館長、国立市教育委員会教育長等を歴任された徳永功氏の著書『個の自立と地域の民主主義をめざして—徳永功の社会教育』（エイデル研究所刊）に詳しい。

係から



図書室70周年にあたり、寄稿いただいた皆様ありがとうございます。それぞれの文章から、これまで大事に思ってきたことや、関わってきた人々の営みが感じられ、改めて図書室の歩みをゆっくりと振り返ることができました。

まだ本が貴重だった頃に土曜会のメンバーが「捨てるような本はいらない。みんなに読ませたい本をください」と言いながら町中から本を集めて土曜会図書館を開館したことや、ブッククラブでは一人ではなく、共に学ぶことの意味を参加者一人ひとりが意識することの大切さ、公民館図書室独自の蔵書が利用者の学びを広げ、新たな扉を開いていることなど、今の活動がこれまでの積み重ねに基づいて続いていることを改めて意識する機会となりました。

最近始まった図書館や郷土館と連携して市民が自由に本を交換する「まちじゅう本棚」や、閉室後の図書室で講座を行なうなど本にまつわる新しい取り組みの中でも、市民の主體的な「まなび」を支えることを大事にしています。これからも、これまで紡いできたことを大切にしながら様々な市民と共に公民館図書室を育んでいきたいと思います。

公民館図書室と

読書と私

黒川 祐子

国立市公民館図書室は開設から70年を迎えるとのこと。おめでとうございます。人なら「古稀」。中国・唐代の詩人は「人生七十年 古来稀なり」と述べたとか。

国立市公民館図書室の蔵書内容は、私を知る他の図書館（室）とは少し違っているように感じられます。いわゆる街の図書館より少し特別な本達もあり、決して大きくはない図書室に歴史、社会科学、自然科学、芸術等々分野も広く、各分野においても珍しい本も、古いものから新刊まで揃えられているように思います。

うかがうと、公民館で開催される講座や催し物のテーマ・内容に関連した本も置き、国立市民のまなびと結びついているのだそうです。図書室を運営する人達と利用する人達で作り上げてきたんですね。昨年、公民館70周年の「公民館とわたし」欄に「ずっと以前からたくさんの国立の人達の記憶が、この図書室に蓄積され、現在の私達へ、そして次代へ受け渡されて行く」と書かせてもらいましたが、書棚に並んだ本達を眺めていると、

蔵書された各時代の空気感みたいなものも本の形をとって重なり、層を成しているように感じられます。「私の本棚※」では、そんな層の中から私の好きな分野で、主に公民館図書室の書棚からいくぶん古めの本も含めて選びました。

最近、発行されてから少し時間が経つと多くの本が書店から消え、出版社に問い合わせても入手しづらいことがあります。まして「実用」とは程遠い自然科学や民俗学等の本はとくに難しくなります。図書室ではそんな本達も探すことができます。私が担当した「私の本棚」では、必ずしも多くの人に読まれるわけではない地学、民俗学方面からも、発行から多少時間が経ち書店では見られないけれど、今でも興味深く読んでもらえそうな本達を公民館図書室の魅力の一面として選んでみました。

本は、ここではないどこか、別の世界への扉。本を読むことで日本だけでなく、世界の各地へ、宇宙へも、過去へも、望めば空想の未来へも旅することができそうです。「読書」により「知る」ことの楽しみ。もちろん実体験は大切なことですが、自分自身を経験しようもないことも、読書で鍛えた想像力が「知る」ことを手助けしてくれます。知り得たことは自分の中に降り積り、さまざまにつながり合っていくのが面白いのです。例えば登山ガイ

ドに載っていた峠の古道に、遺跡発掘の本では古代の祭祀跡をみつけ、宮本常一達の民俗学調査の本では御神楽、郷土食の本では地域の伝統食を知り、離れた地域でそれらが似ていることから、古くからの街道沿いの交流について想像をふくらませています。

本はさまざまな旅に連れ出してくれる「船」になるのです。図書室はそんな船が集まる「港」。カウンターの職員さん達は旅にふさわしい船を選んで港に導く「水先案内人」、あるいは旅のコンシェルジュ。あまり多くの人に読まれていない分野の本、前回どなたかが借りてから数年以上経つような本を探す私は、書棚に見当たらない本を在庫から出していたいたり他の図書館から借りていただいたり、公民館図書室の職員さん達に大変お世話になっています。拙い一言の感想も暖かく聞いていただき、いつもありがとうございます。これからも本達を巡って旅は続きます。どうぞよろしくお願いいたします。

※公民館図書室では、市民に交代で図書室月報に「私の本棚から」として連載で本の感想や紹介を書いてもらっています。黒川さんには2024年10月〜2025年3月に担当していただきました。



図書室月報関連年表

- 1955 公民館開館
- 1956 土曜会図書館の蔵書1300冊、書架5台の寄贈を受け、公民館図書室開室
- 1959 「月報」第1号発行（力り版）
- 1964 第1回「図書室のつどい」開催
- 1966 「月報」50号
- 1970 「月報」活字印刷になる
- 1971 「月報」100号記念特集
- 1974 中央図書館開館、公民館図書室の3分室を図書館に移管
- 1977 第1回「読後感を語るつどい」開催（のちに「文学講座」、「くにたちブッククラブ」となる）
- 1979 公民館改築
- 「月報」200号記念特集
- 1984 「月報」250号記念特集
- 1985 公民館創立30周年のこの年、「月報」が朝日新聞「読書」欄に「市民の書評紙」として紹介される
- 1988 「月報」300号記念特集
- 1996 「月報」400号記念特集
- 2005 「月報」500号記念特集
- 2006 「月報」公民館図書室50周年記念号
- 2010 第27期公民館運営審議会が第23回定例会で月報の存続を要望
- 2011 第28期公民館運営審議会より「公民館図書室の管理・運営について」の答申が出される
- 2013 「月報」600号記念特集
- 2020 「月報」公民館ホームページに掲載開始
- 2021 「月報」700号記念特集
- 2026 「月報」公民館図書室70周年記念号

ブッククラブから

羽田圭介著「スクラップ・アンド・ビルド」感想

伊藤 久仁子



この小説は『文藝界』2015年3月号に掲載され、第153回芥川賞を受賞しました。主人公の健斗は新卒で勤めた仕事を5年で自己都合退職し、アルバイトと求職活動をしなが、実家で母とその実父である祖父と同居しています。定年後、嘱託勤めの母は87歳の祖父を自宅で介護しています。健斗の視点から、家族3人の暮らしが描かれます。長崎生まれの祖父には5人の子ともがいます。長崎で次男夫婦と同居していた祖父でしたが、しだいに次男家族と不和が生じ、同じく長崎在住の長男宅に移ります。ところが、長男の発病と経済的な不如意で、長崎を離れ、埼玉在住で独身の三男と同居します。その4年後、今度は東京郊外に住む長女（健斗の母）が父を引き取り、3年が経ちます。年老いた祖父は身体の衰えが著しく、生活全般に介助が必要です。折々に「健斗にもお母さんにもみんなに迷惑はつかけて、すまないと思う。じいちゃん、早う迎える来てくれることば毎日祈ってる」と言うのですが、かなり癖のある人物であることも感じられ、健斗は同居の孫として、祖父の境遇をふびんに思いつつ、引き取っては次々とギブアップした親族たちの苦勞を実感します。

祖父との関わり方を模索する健斗は、介護職である友人の助言にヒントを得て、祖父が口にしてやまない死の願望を叶えるべく、過剰な足し算の介護による「尊厳死のアシスト」を決意します。優しく親切に、なんでもしてあげることが、衰えた身体機能のさならなる低下をもたらすと知ったからです。ここではつと気づくのは、母の祖父への接し方です。母は祖父に対し、素っ気なく突き放す態度をとります。しかしそれは、祖父を自力で動くよう仕向けることで、身体機能の維持を図る「生のアシスト」なのでした。こうして、身も心も閉塞しがちな日々の暮らしの中で、祖父も健斗も、目先の不快さや苦痛から逃れる「先送り思考」でその場を乗り切ろうとします。しかし、国民健康保険料の納付額に苦慮した健斗が、若年世代に問題を先送りする世の中に憤る描写に、現代社会全体に蔓延する「先送り思考」への、作者の批判的な思いを感じます。

小説の終盤、健斗は再就職に成功し、実家を出ることを決めます。母と埼玉の叔父は、

祖父の終の棲家として、長崎県大村の特別養護老人ホームに入所予約を入れます。と言うと寂しいようですが、意外にもからりと乾いた印象で、健斗と祖父それぞれの「次の場所」への覚悟が伝わりました。『スクラップ・アンド・ビルド』という題名には、再生のためには解体・破壊が必須であるという暗示を感じました。このことは、個人でも家族でも、あるいは社会システムそのものについても、あてはまるかもしれません。

さらにもう一つ、印象的な描写があります。健斗は、京王相模原線新宿行き車内で乗り合わせた人々を眺めながら、自分の心に潜む、ある感情に気づくのです。それは、「祖父Ⅱ自分より弱い肉体」を支えることで、自尊感情のようなものが生まれ、それが自身自身の「拠り所」になっているという自覚です。しかし、自分よりも弱く劣っている存在によって、かろうじて維持される自尊心があるとすれば、実は、私たちの社会も「見せかけの安定」を維持するためには「弱者」を必要としているのかもしれない。小説を読みながら複雑な気持ちになりました。

健斗は、介護される身に甘んじて生命力をあえて抑え、弱さを擬態することで老年期を生き延びてきた祖父の生き方に気づきます。それは、祖父の「弱さの擬態」が破れた瞬間を、健斗が偶然に目撃し、驚く描写によって表されています。たとえば、家族の留守中に「冷凍ピザに野菜をトッピングしオーブンで焼く」という複雑な家事を「珍しい夜行生物のような俊敏な動き」で実行したり、デイスービスで若い女性ヘルパーの身体に必要以上に接触しようとしたりする祖父の姿です。祖父が家族に見せている「弱さ」は、生きるためのしたたかな企てかもしれません。

作中世界は京王線沿線です。健斗が住む坂道の多い町、多摩川や調布飛行場、新宿と八王子を往来する京王線の描写が印象的です。さらに、祖父が話す長崎弁も、作品全体にユーモラスな味わいを添えています。

この小説はすでにNHKでドラマ化されていて、健斗役は柄本佑が演じているそうです。今度ゆっくりオンデマンドで観てみようと思います。

(文春文庫)

くにたちブッククラブ

—なぜ、その道を選んだのか—

野上弥生子『真知子』 (ちくま文庫)



講師 おだいら 小平 麻衣子 (慶應義塾大学・日本近代文学)
 と き 9月17日 (木) 夜7時半～9時半
 ※第2週ではないのでご注意ください。
 ところ 公民館 3階講座室
 申込先 公民館 ☎(572)5141
 またはホームページより申込

この講座は、
 あらかじめ作品を読んできて、
 参加者が「読み」を出しあいます。
 講師のお話も聞きます。



▲ 講座詳細

- * 次回は 10 月 8 日 (木) 、高瀬隼子『おいしいごはんが食べられますように』 (講談社文庫) です。
- * 4 月号でお知らせできなかった 11 月と 12 月の日程が決まりましたのでお知らせします。11 月は 12 日 (木) 、12 月は 10 日 (木) です。

〈私の本棚から 第5回〉

モハメド・オマル・アブデイン著
 河路由佳 聞き手 / 構成

『日本語とにらめっこ』
 —見えないぼくの
 学習奮闘記—

高遠敬子



アブデインさんとの出会いは、公民館主催の「多文化共生講座」でした。流暢な日本語でややギャグも入れながら軽快に話されていた面白いアブデインさん。実はアブデインさんは弱視で生まれ12歳には視力を失っていました。残された聴力で言葉を獲得し、友達にも助けられながら、母国スーダンの東大と言われるハルツーム大学に入学しました。が、戦争もあり日本の鍼灸の留学生として来日することを決心したのです。

アブデインさんは日本語を学ぶために点字や朗読図書、音声パソコンなど、様々な方法を取り入れ日本語を獲得していきます。周囲のホストファミリーや先生、友達に支えられながら、日本語検定試験1級にも合格します。漢字は試験に出なかったものの、ホストファミリーの先生にコミュニケーションの役に立つからと勧められ漢字の学習も始まります。私も図書室のついでで、私の名前を告げた時アブデインさんは「ケイコは漢字で書くと、木へんに土二つかな? (桂子)」「いえいえ、違います。尊敬の『敬』です」と言うとともに「ああ」と納得していらつしやいました。

漢字の形を粘土で作ったり、音読み訓読み、部首を覚

えたりしたアブデインさん。漢字の「大」を初めて知った時にも『くつろいでいるなあ。こんなにくつろいでいいのかなあ』と思いましたね。ぼくも、学校から寮に帰るとあの形で寝ていましたから、『ああ、ぼくだ。しっくりくるなあ』と思いました。」と書かれていて素敵だなあと思いました。私も小学校の教員として1年生に漢字の「大」を教えた時に、みんな大きく手を横に広げ、「うわあ、大きくなったね」と言っていたことを思い出しました。柔軟な思考、これがアブデインさんの強みですね。

さらに漢字を学ぶ上で漢字の意味を知るとはとても大切だと本の中で書かれています。例えば、熟語の「コウソウ」なら「構想」なのか「香草」なのか「抗争」なのか、文脈によってどの漢字を使うべきか意味が分かれれば答えられます。確かに、小学生で読み書き障害があっても、音声入力をする際に、正しい漢字を選択することができればエラーは減ります。文脈に沿って漢字を使うことがいかに大切か。さらに日本語のリズムの美しさについても触れていました。夏目漱石の『坊ちゃん』は力強くリズムも良い。文章に合ったテンポで、夏目漱石は現代でも分かりやすいと。本当なのか早速YouTubeで聴いてみると、なるほど、物語に合っていてダイナミックでリズムカル! 文学を耳で聴く楽しみ方を初めて知りました。

この本を通して、アブデインさんの日本語を獲得しようとする情熱とハングリー精神、そしてユニークな観点。優しいお人柄。アブデインさんのこの姿勢が色々な人達とつながり、人生を深めていくのだと思いました。語学は、語学で終わらない。ことばは、人と人を結びつける大切なものと改めて学ぶことができました。

(白水社)